

2

立ち読み版

# イセリア 英雄戦記

the Legend of the Aespera War

編集 二次元ドリームマガジン編集部

挿絵 牡丹



第5話

熱砂の淫獣

——  
本文担当…舞麗辞

007

第6話

槍騎士陵辱と壁面の謎

——  
本文担当…筆祭競介

059

第7話

魔騎士覚醒

——  
本文担当…天草白

111

第8話

クアールの怪物

——  
本文担当…大熊狸喜

179

Bonus

Track

235

## 登場人物紹介

Characters



### セリーヌ＝アヴァリアレス

イセリア英雄国の騎士。外交も任せられ、皇女からは絶大な信頼を与えている。お菓子作りが趣味という可愛らしい一面も。



### フィオナ＝ブリティッシュ

イセリア英雄国の皇女。少し世間知らずなところがあるが、幼馴染みのセリーヌのことをとても大切に想っている。



### リア

イセリア諜報部隊「クロウ」に所属する暗殺者。仲間の前では無邪気な姿を見せる。



### アリオナ＝ブリティッシュ

イセリア英雄国の現女王であり、フィオナの母親。メイズの瘴気にあてられていたため、病に臥せていた。



### マイハ エルス＝M＝アムデルト

イセリアの第三騎士団団長を務める貴族令嬢。聖なる槍〈セルフェザー〉と特殊能力〈マイハ反応〉を使う。



### レーシア＝スカール

第三騎士団の副団長を務める少女。エルスを「お姉様」と慕っている。



### ギュスターヴ

バードベルグ帝国の皇帝。元は宰相だったが、前皇帝が没した際に事後を任せられ、皇帝の座に就いた。ギュスターヴというのは通り名で、本名はベリアルド＝オーギュスタン。



### ウオルガード＝オーギュスタン

バードベルグ帝国の将軍。傲岸不遜な性格ながらも、戦いにおいては真摯で、正々堂々真正面から勝って蹂躞するのが好む。オーギュスタン家の嫡子。



### ジュダ

クレオラ砂漠都市の王子。人当たりよく振る舞ってはいるが、サラの教育の影響で、心の奥底では女性のことを自分の性処理道具のように考えている。



### イシュア

クレオラ砂漠都市の女王。物腰は柔らかく、理知的な女性だが、息子であるジュダには甘い姿を見せる。



### サラ

クレオラの王子ジュダの教育係。侍女であるにもかかわらず、ジュダへの態度が少しおかしいようだが……。



### ヒツギ 氷継

フェイエン王家に仕える女執事。アイマスクをつけているが、気の流れを読み取る「心眼」で外界の状況を察している。アイマスクの上に眼鏡をかけているのは、彼女曰く「私の心眼は近眼なんです」とのこと。



### マリイン＝ルウ

クアール大同盟で水生生物学を研究している学者。本来は戦闘をするタイプではないが、湖に巣食うタコ怪物との戦いに備え、フィオナの乗る船に同乗する。

# イセリア英雄戦記とは？

## 二次元ドリームマガジン史上初の 超長期連載&読者参加型のリレー小説！

読者の参加によって物語が展開する。

A. ○○ルート  
B. △△ルート

読者の投票で展開が変化！

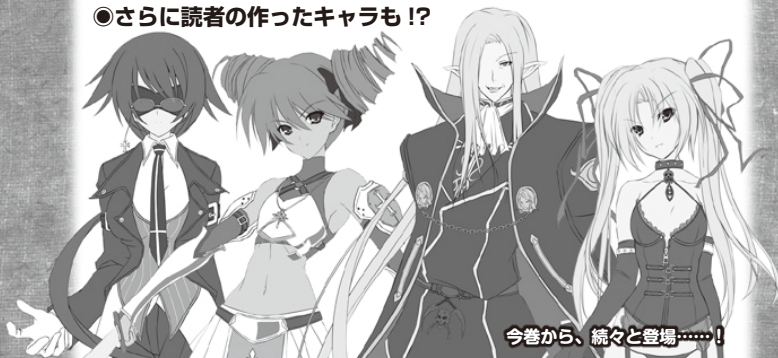
A. ○○ルート  
B. △△ルート

雑誌連載時には、本文中に選択肢が設けられています。アンケートハガキで「どちらが読みたいか」を投票していただき、より多くの支持を受けた選択肢に沿って物語が展開していきます。また、外伝小

説やオリジナルキャラクターを投稿することで、読者の皆さまで『イセリア英雄戦記』を作る楽しみを味わってください。

※選択肢は雑誌掲載版のみで、単行本では選択肢は削られています。ご了承ください。

●さらに読者の作ったキャラも！?



今巻から、続々と登場……！

### リレー小説形式での超長期連載

第5話  
舞麗辞先生

第6話  
筆架競介先生

第7話  
天草白先生

第8話  
大熊狸喜先生

今巻では第5話は舞麗辞先生、第6話は筆架競介先生、第7話は天草白先生、第8話は大熊狸喜先生と、1話ごとに本文を執筆する作家が変わります。また、連載回数が23回(2012年12月現在)を超える超長期連載によって、ヒロインたちがいつ墮ちるのが予想

できなくなっています。一話ごとに雰囲気が変わる文章や、いつ墮ちるかわからない緊迫感をお楽しみください。

※奇数話ではセリヌ視点、偶数話ではフィオナ視点で物語が進み、第7話および第8話の直接の続きは、3巻収録の第9話および第10話となります。

### 公式サイトでさらに楽しく！

読者による投稿小説や投稿キャラクターが公開されている公式サイトでさらに『イセリア英雄戦記』を楽しめます。登場キャラクターのスリーサイズや国の設定

などもまとめられており、現在行っている人気キャラクター投票などのWebコンテンツも今後、他のコンテンツを追加予定です。

『イセリア英雄戦記』公式サイト

<http://ktcom.jp/icerya/>



第5話

熱砂の淫獣

著：舞麗辞

その思いがエルスの行為をよりいっそう大胆なものにさせた。

超一流の槍騎士として磨かれた実戦的な対応能力が、処女とは思えないテクニックを繰り出させる。

「ブヒヒいッ!!」

「こいつ、なかなか上手いブヒ」

手首に捻りを加えながら左右の男根をリズムカルに扱く。

尖った肉先を自らの豊かな胸に埋めるように擦りつける。

すると、どちらのペニスもビクリとさらに硬度を増して、その先から透明な汁が噴き出し始めた。

啜えているペニスも同様だ。

唇で肉幹を絞りながら思いつきり頭を振り、金髪の縦ロールを振り乱すようにしてむしやぶり回すと、先端から生温いヌルみが滲み出してくる。

（こ、これは……何なんですの？）

舌が痺れるような苦味に加え、鼻孔の奥に突き刺さるような生臭さだ。

対して三匹のオークは軽く顎を上げて、ブヒブヒと気持ちよさそうに鼻を鳴らし出す。

「俺たちの先走りでおっぱいがヌルヌルになってきたブヒ」

「も、もうイキそうだブヒ」

「もつとだブヒ。もつとズリズリおっぱいにチンチン擦りつけろだブヒ」

ペニスから滲み出ている未知の体液は、どうやら『先走り』と言うらしい。

エルスは言われるまま、豚ペニスをさらに積極的に胸に擦りつけた。

——ズにゆんずりずり、むにゆズリリンっ。

もつとも柔らかい肉厚な下乳に先端をめり込ませ、はね上げるように乳首まで擦り抜く。すでにガチガチに硬直している己の乳首で、同じく硬直しきった男根をコリコリと何度も愛撫する。

先走りの効果でいくら強く擦りつけても痛みはなく、二本の男根と左右の美峰乳がヌルヌルと淫らに絡みあう。

——ひくン。ひくひくン……。

そんな行為を続けていると、身体に僅かな違和感を憶えた。

おかしい。妙に身体が火照っている。

(……なにか……ヘンですわ……)

男根と密着した乳肌から、まるでその淫熱が胸の奥へと染み込んできているようだ

硬直した乳首を尖った肉先で強く弾かれる度に、こめかみ辺りにビリビリと官能のパルスが響いてくる。

「……ツツ!!」

それは紛れもない肉体的快感。

嫌悪の対象ではない豚モンスターに奉仕することによってもたらされる、背徳の肉悦

だった。

(う、嘘ですわ。……こんなの……何かの間違いですわ)

しかしいくら頭で否定しても、継続的に胸元から響いてくる熱気を帯びた愉悦は消えない。

どれほど忌み嫌うゲスが相手でも、健やかに育った女騎士の若い肉体は性に正直だった。乳首という特別敏感な性感帯を執拗に責められることにより、官能の細波がそのグラマ—な女体の奥から湧き立ち続ける。

あるいは口にした先走りの粘液に、媚薬的な効果でもあるのだろうか……。

両手が、胸が、そして口が——豚たちのペニスと密着している部分がすべて熱い。

オークたちの淫熱によって暖められているだけでなく、己の身体が戦闘時とはまるで違う火照り方をしている。

「この牝、さっきまで俺たちをすごい視線で睨み上げてたくせに、目がエロいカンジでトロンとしてきたブヒ」

「俺たちのチンポをしゃぶりながら感じ始めてるブヒ。とんでもないドスケベだブヒ」

オークたちは非力なザコ獣人として生き抜いているだけに、相手の状況を見抜く目だけは確かなものがあった。

(……ま、まさか、そんなはずありませんわ)

口々に浴びせられる嘲りを頭では否定するのだが、現実には己の肉体で発生している現象



を無視はできない。

「コイツSと見せかけて、実はドMだブヒ。なじられて身体が小さくビクビクしてるブヒ。たまらんブヒ」

自分を見下ろす豚面に見下しきった表情が次々と浮かび出す。

今見せているエルスの反応が、豚たちの興奮をより高めさせているのは明らかだ。

中でもフィニッシュに近いのは、終始エルスが右手で扱いてた右側のオークだった。

「イ、イキそうブヒ！ もっと乳首にズリズリ擦りつけるだブヒ！」

今にも血管がはちきれそうなほど肉棒を漲らせた豚獣人が、自ら腰をカクカクと小刻みに振り出した。

(な、何て激しさなんですの!!)

その尋常ではない昂り方は、悪魔化していたルシィフが絶頂した時と酷似していた。

筒状にした手のひらにペニスをガムシヤラに突き入れながら、肉先を一際深くバストに埋め込んでくると――。

どりゅん！ ドリユドぶっ！ どりゅどぶどぶんっ！

火傷しそうに熱い肉汁が、尖った先端から噴出する。

「んんっ！ ツツッッんんんっ！」

それがゼロ距離から豊かな胸を直撃。

噴き出た汚液がブパアと飛散し、鴉色の乳首から見事な半円を描く下乳に至るまでを、

ドロドロの白濁液塗れにしていく。

(……こ、これが牡の精液……)

先ほど自分が浴びたのは鳶触手の粘液だ。

本物の生殖液ではない。

しかし今身体に浴びているのは、子宮に注がれば孕む危険のある人型モンスターのザーメンである。

それだけに嫌悪感は一際大きく、エルスはペニスを唾えたまま、その熱さと勢いにくぐもった悲鳴をあげさせられる。

「こっちもイクブヒ！ 口マンコで思いつきり中出ししてやるブヒ！」

仲間の白濁液に汚された美峰乳に興奮したのか、口を犯していたオークまで限界を告げてくる。

(ま、まさかこのまま口の中に!?)

しかし根元まで男根を唾えさせられて、後頭部を掴まれていては逃げようがない。

カクカクと腰を振りたくり口腔性交で果てようとする牡豚の為すがままだ。

「ブヒィ！」

豚の股間に密集している剛毛に唇が埋まり、口内に今までとは比較にならない生臭さがドッと漏れたその直後。

——ドぎゅんッ！ ドプどりゅッッ！ ドプどりゅどぶん！

口蓋に射精の直撃を受けた。

(何て量と勢いなんですの！)

その灼熱の衝撃は凄まじく、口腔の真上にある脳を強く揺さ振られ、脳震盪を起こしそうなほどだった。

「ふぐっ!? つぐう……んっぐうっ」

エルスは根元までペニスを咥えさせられたまま、その脈動に合わせてくぐもった声をもらし続ける。

脂ぎったオークの体臭を煮詰めたような、生臭さもたまらない。

(し、しかも……とんでもない濃さですわ)

口腔を満たす、ドロドロとしたザーメンの粘っこい感触と合わせて吐き気を催す。

「ぶひー」

思う存分、口内射精を堪能したオークは最後の一滴まで絞り出すと、満足そうに一鳴きして腰を引いた。

やっとな口が解放され、すぐさま口内の汚液を吐き出そうする——しかし。

「吐き出すんじゃないブヒ！」

まだイッていない残りの一匹に止められた。そして前髪を掴まされると俯きかけた顔を強引に上に向かされる。

(これ以上、何をする気なんですの……)

エルスは口内に溜まる精液の生臭さでまともに鼻孔で息ができず、このままでは窒息してしまう。

対して興奮しきった豚獣人は眼を血走らせて激しくペニスを扱っていた。

しかもその尖った肉先は、真っ直ぐこちらに向けられている。

「口を開けるブヒ！ ちんぼ汁に浸ったお前の舌を見せるだブヒ！」

昂りきったオークの言動に、エルスはやつとその真意を悟った。

(……コ、コイツら……どこまで……)

仲間の精液によって汚された女の口内まで覗き、それを下劣な興奮の足しにしようというのだ。

エルスはあまりのみじめさに眉間に深い屈辱の皺を刻みながら、言われるまま唇を大きく開いた。

桃色の舌が、濃密な白濁液にどっぷりと浸っている姿をゲスな視線に晒す。

「飲めブヒ！ ごっくんしろブヒ！」

直後、切羽詰まった上擦り声で、豚が地団駄踏むように両脚をバタバタさせながら、さらに無茶な要求をしてくる。

(なっ!! そ、それは……)

我が耳を疑うその命令に、エルスはどうとう首を小さく左右に振っていた。

「何を今更嫌がつてるブヒ！ お前が嫌なら、あつちの牝に俺のションベンごとチンポ汁

を飲まずブヒ！」

あまりの理不尽さに、手のひらに爪が深く食い込むほど両手を強く握り締める。

目の前ではフゴフゴと尋常ではない鼻息の荒さでオークが肉棒を抜きながら「早くしろブヒ」と急ぎ立ててくる。

エルスの胸には絶望が広がっていた。

人外の化け物に口内射精を許し、その肉汁まで飲み干せば、騎士としての誇りはおろか、人としての矜持すらも地に墮ちる。

騎士団団長として部下の生死を分ける命令を下すこの口が——将来夫となる人と永遠の愛を誓うためのキスを交わすこの口が——。

豚の劣情に汚され尽くす。

もう二度と、今までと同じように気高い言葉を紡ぐことができなくなる。

(ああつ、そ、それでもわたしは……)

アムデルト家に生まれ、マイハのミドルネームを得たからには、イセリア公国を——フイオナ王女をこの身を挺しても守らなければならぬ。

たとえそれが、死よりも辛く厳しい道だとしても……。

エルスは言われるまま口を閉じ、ギユツと瞳を閉じた。

そして、たっぷりと躊躇した後に——ごつくん——と反らすようにしていた剥き出しの咽を大きく上下させる。

まるで糊のように粘りつくザーメンが、咽に強く絡みつきながら食道を通っていく。  
「ブヒィ！」

それを見た正面のオークが一鳴きし——びちゃびちゃびちゃアアアッ！  
反らした咽に新たな肉汁をぶちまけられた。

咽の内側も外側も、豚獣人の生温かい精液塗れとなる。

「飲んだブヒ。俺たちのちんぽ汁を、この細くて白い咽をゴクゴクさせて飲んだブヒ」  
射精したばかりのオークは、自分の吐き出した汚液を、自らの肉棒で執拗に女騎士の咽から顎の裏にかけて塗り伸ばしてきた。

まるでそうすることで、お前のココは俺のものだと宣告でもするように。

（ああ……わ、わたしはこんな豚どもに……）

顔だけではなく、身体の中まで精液を注ぎ込まれた。

肉体的にも、精神的にも、今までの自分には二度と戻れないと改めて実感させられる。

最後に頬で汚液の残滓を拭われて、やっと三匹目のオークから解放された。

しかし今のエルスに休む間などない。

「途中からずっと見てたブヒ」

「コイツとんでもないエロ牝だブヒ」

「約束通り、俺たちがお前を女にしてやるブヒ」

王女に群がっていた三匹が、新たにこちらに向かってきた。



可憐な美少女は小尻を高々と掲げた姿勢のまま、うつ伏せに倒れている。桃色の唇から時折零す吐息が、幼い少女とは思えないほど艶めかしい。

「おいおい、これくらいで参ってもらっちゃ困るぜ。まだまだ順番待ちが控えているんだからよお」

先ほどの二穴責めに加われなかった男たちが舌なめずりをしながら、リアに迫った。誰も彼もが下半身を剥き出しにしている、腰から屹立したものは臍にくつききそうなほど反り返っている。

リアは、といえば同時にふたりの男から精液を注ぎ込まれた余韻に浸っているのか、紅色の瞳をとろん、と潤ませ、近づいてくる野卑な男たちを虚ろな表情で見詰めていた。

——その後、輪姦は数時間にも及んだ。

盗賊たちがひととおりリアを犯し終わると、部屋の中にはムツとするような饜えたにおいが立ち込め、美少女の起伏の少ない裸体は半ば以上が白濁に塗れていた。

「ぐふふ、おじさんのせーし、また注ぎ込んであげまちゅからねえ」

リアの華奢な肢体にゴメスのでっぷりと太った身体がのしかかり、飢えたような腰つきでピストンを浴びせかける。

「あつ、いいつ、もつとついてえ！ 太いのでおくまでえ……はあん！」

性の魔悦を知ってしまった幼女は快樂に顔を歪めながら、あれだけ唾棄していた男の肉



棒を蕩けるような笑顔とともに受け入れていた。ぐちゅ、ぐちゅ、とぬめった音を立てて、ゴメスが肉棒でリアの蜜壺をかき回す。

「また……いくう！ ああ、きもちよくなっちゃううっ！」

すでにリアの膣内は十数人の男たちが放ったスペルマによってヌルヌルにぬめっており、処女を奪った時のキツさが嘘のように滑らかなピストンが可能となっていた。

とはいえ、十代の美少女の膣孔の狭さは変わらず、一突きするごとにゴメスの肉棒を強く搾り上げる。腰骨の奥にまで響くような快感に全身を震わせながら、ゴメスはスラストを強めていった。

「これだけたくさんの男にせーしを注がれたら、誰の赤ちゃんかわからなくなりまちゅねえ」

「えっ……!! い、いやあっ！ あかちゃん……だめ、だめえ！」

虚ろにかすんでいたリアの瞳に再び輝きが戻った。輪姦されているうちに半ば麻痺していた妊娠への不安や恐怖が、ゴメスの一言によつてぶり返したらしい。怯えきった顔でゴメスを見上げ、弱々しく懇願した。

「だめなのお……ほんと……う……あかちゃん、できちゃう……」

ひっく、ひっく、としゃくり上げながら、リアが嗚咽混じりの声をもらした。並の人間ならか弱い美少女にここまで嘆願されればその通りにしてしまうのかもしれないが、ゴメスは違う。

それどころかリアに対する嗜虐心をますます刺激され、何が何でも己の子を孕ませてやりたいという気持ちを爆発させ、今まで以上に強烈なストロークを浴びせかけていく。

「ふふふ、カワイイ赤ちゃんを産むんでしゅよお。ほうら、おじさんのせーし、たくさん流し込んであげまちゅからねえ」

猫なで声でささやきながら、ゴメスは贅肉の詰まった上半身を倒して、リアの細い上体を抱きすくめた。両手で頬を挟み込むようにして固定し、そのまま光沢のある桃色をした唇に自分の唇を寄せていく。

「だ、だめえ、ああんっ」

嫌悪感を露わにするリアだが、所詮幼い少女の腕力では巨漢のゴメスに抗えるはずもない。ゴメスはゆっくりと焦らすように顔を近づけ、

「んっ……ぐううっ!? あ、むうっ……!!」

肉厚の唇をびったりと押しつけ、美少女との甘い口づけに浸った。リアの唇は柔らかくぷりぷりとしていて極上の肉質を備えている。

「んんんっ……!!」

先ほどまであれだけ嫌がっていたというのに、ゴメスが強引に舌をこじ入れると、リアはたちまち喜び勇んで舌を巻きつけてくる。それどころか自ら舌をうねらせ、ゴメスの舌をギュッと搾り上げて、より深く口中へと吸い寄せる。

美少女の側から積極的なディープキスを迫られ、ゴメスは至福の感触に酔いしれながら、

腔洞への出し入れをスピードアップさせていった。

「はああんっ、もっとお！ もっとおついて、ゴメスさまあ！」

もはやリアが完全に性の虜となつてゐることは、ゴメスの目にも明らかだった。どれだけ嫌がついていてもキスひとつで、あるいは深いピストンを浴びせるだけで、たちまち身も心も蕩かせてしまう。

生硬だった処女の腔壁も度重なる肉交によつて完全にほぐれてゐた。ゴメスが根元まで打ち込むと柔らかなヒダ肉が蠢き、肉棒の表面に絡みついてくる。

リアは間もなく奴隷商人に売られてしまう。その後でも自分のことを忘れさせないために——自分がリアにとつて初めての男だということを一生涯に渡つて心と身体に刻み込んでやるために、ゴメスは熱い妄執のすべてをぶつけるように律動を浴びせかけた。

「い、いやっ……そんなにつかれたら、リア……リア、またいっちゃう……はああ、だめえ！ いくつ、いくつうっ！」

可憐な嬌声とともに、リアの秘肉はますます強くゴメスの分身器官を搾り上げる。男竿の先端から根元までを稲妻のごとき悦美が走り抜け、ゴメスは弁髪を振り乱しながら叫んだ。

「ほうら、そろそろ出しまちゅよお。おじたんのせーしで元気な赤ちゃん、孕むんでちゅよお、リアたん！」

「えっ!? だめ、あかちゃんなんてだめえ！ 出しちゃだめなお！ ああ、でもきもち

い——はあああっ!!」

拒絶とも愉悦とも取れるリアの絶叫が響く中、ゴメスはラストスパートとばかりに一際強い一撃を叩きつけた。

短小ペニスを根元までこじ入れ、小刻みに腰を震わせる。腰の芯に燃え上がった鮮烈な射精感。ペニスの根元から先端に向かって駆け抜け、そこで熱い衝動となつて解放された。「うううっ、出ちまちゅよお! そうらっ!」

リアの胎内が内側から弾けそうなほどの、ありつたけの精液を注ぎ込む。

「あ、あつ……いっ! きゃああつ、きちやうう! いく、いくう!」

膣いっぱい進った精の熱さでさらに強いオルガスムスへと押し上げられたのか、リアは甲高い嬌声を連続してあげた。華奢な四肢を激しく震わせ、全身で絶頂を表現する。

「いく、いくのお! ああ、あつたかい、せーし、出て……はあああつ、いっくうううっ!」

膣内の柔肉がぐねぐねと動き回り、ゴメスの肉棒をより強く搾り上げる。亀頭から付け根までを甘く押し潰される愉悦に喘ぎながら、ゴメスはリアの腰を思いつき引き寄せて結合を深めた。

「ぐふふふ、おじさんのせーしでお腹の中をいっぱいにしてあげまちゅからねえっ! そうら、孕め! 孕めええっ!」

自分の子供を種付けしてやろうという原始的な欲望のままに、ゴメスは精巣が空になるほどの勢いでスペルマを注ぎ続けた。膣孔から溢れ出すほどの精液を放出し、なおも射精



の勢いは止まらない。

「ああつ、まだ出て……きやあああつ、いく……うつ！」

あまりにも濃厚な腔内射精にリアはもはや声も出ない。どく、どく、とゴメスがすべてを出しきると、小さな子宮には収まりきらなかったのか、なだらかな腹部はぷっくりと膨れ上がり、さながら少女妊婦のようだ。

「これだけたくさんのせーしを下のお口で飲み込めば、きっと赤ちゃんができまちゅねえ。ふふ、母子そろって奴隷になるのもいいでちゅねえ」

「どれ……い……？ ああ、そんなあ」

リアは力なく呻くと、そのまま動かなくなつた。

クレツセントブレス——魔力によつて矢の威力と速度を倍加し、鋼鉄の鎧をも紙のように射抜く必殺術だ。今まで幾多の強敵を屠<sup>ほぶ</sup>つてきたこの術に、ベロニカは絶対の信頼を置いていた。

——だがその信頼は今、もろくも崩れ去る。

胸元を貫かれ、倒れていたセリーヌが唐突に起き上がった。吹き荒れる爆風の中、靡くロイヤルブルーの長髪は闇夜を思わせる黒色へ、切れ長の双眸は藍色から鮮血のごとき真紅へと変貌を遂げる。

「なに、確かに心臓を射抜いたはずが……!!」

「グ…………オ…………オオオオオオオンッ！」

およそ人間の咽から発せられたとは思えない、獣染みた咆哮が響き渡る。

胸元に突き刺さっていた矢が轟音とともに燃え尽きた。溢れ出した魔力が赤と黒の竜巻となつて荒れ狂う。物理的な破壊力さえ伴つて地面をえぐり、周囲の建造物をまとめて薙ぎ払う。

「人間が…………たったひとりの人間がこれほど莫大な魔力を!？」

勇猛果敢で鳴らしたベロニカだが、さすがにこの光景には色を失つた。心臓を貫かれ、死んだはずの人間が再び動き出すなど、どんな魔法をもつてしてもありえないことだ。

「クラウソラス…………魔力限定…………解除…………。殲滅形態ヲ…………起動セ…………ヨ」

セリーヌが発した声は禍々しいまでの呪詛に満ちていた。先ほどまで戦っていた清冽な騎士とは似ても似つかない、邪悪ささえ感じさせる声にベロニカは戦慄を隠せない。

セリーヌの手にした漆黒の剣がその姿を変える。刃の先端が中央から三つに分かれ、優美な鏢は十二枚の翼に似た形状へと。より巨大に、より禍々しく変じた刀身を紅玉のごとき輝きが包み込んだ。

「ガアッ！」

短く吼えて、セリーヌが地を蹴った。爆発的なまでの速度にベロニカは反応しきれなかった。一瞬にして肉薄したセリーヌが魔剣を二閃する。金属がひしゃげる鈍い音とともに、弓騎士の双剣は粉々に砕け散った。

「仕掛けさえできてしまえば、あとは簡単ですわ。ね、ルシィフ」

爆乳の谷間で同行していた妖精に言うと、妖精はやや真面目に答える。

「ううん、いい方法だと思うけど…この湖はイヤな予感がするんだ。油断は禁物だよ、フイオナお姉ちゃん」

怪物退治を、フイオナが魔法で支援するという提案に、大同盟はさらに戦う船団を用意してくれた。

姫のリーダー船と合わせて、全部で六隻の大船団。

そして、沿岸諸国の水軍戦士たちの中にひとりだけ、戦士ではない女性が同乗していた。

「あ、フイオナ姫様でっすか。初めまして、わたし水生生物を研究してる、マリインールウと申します」

ラフな挨拶をくれた女性、マリインールウは、眼鏡をかけていた。

セミショートの頭髮がサラリと流れ、知的な視線が研究者らしい。服装は、この国の人々の平均的なスタイル。

ノースリーブの短いシャツで、姿勢によつては平均的なバストが覗けてしまいそうだ。縦長のお臍や、引き締まったウエストが露出している。

短いズボンは、パツパツの腿が剥き出しで、足元は脱ぎやすそうなブーツ。

全体的にやや大きいサイズの服で、身に着けている金属は、ナイフのみ。

これは、よく水に入る生活習慣と、湖に落ちても溺れないように。さらに水を吸った重



い衣服をすぐ脱げるようにという、水辺に住む人々の知恵だ。

そんなフランクな挨拶の女性研究者に、厳しい視線を向ける少女がいた。

「貴様っ、姫様に向かって何と馴れ馴れしい挨拶かっ！」

フィオナの前に、盾のように立つ、護衛隊長の少女騎士。

「いいのよ、レーシア」

「は——ハっ、いいエス・マム！」

初めての隊長任務に、緊張の返答をする騎士隊長、レーシア・スカル。

フィオナを守って辱めを受けたエルスの、第一の弟子ともいえる少女だ。

小柄な身体に、紫色の巻き上げツイントールが、チワワみたいに愛らしい。

意志の強そうなツリ目が大きくて、スレンダーな身体と相まって、実年齢よりも幼く見

えた。

第三騎士団団長のエルスを見習い、剣に対する鍛練は人一倍の努力家。

左右の腰には、二刀一対の剣。その腕は、自ら編み出した技をもって、第三騎士団の副団長に抜擢されたほどだ。

姫君の御前で待機姿勢を取る忠義の騎士。それでも、マリインのフランクな挨拶には、お冠を隠せない様子だ。

(レーシア、真面目な子……)

自分のために、メイズの中で醜い怪異たちに辱められてしまったエルス。

元はと言えば、エルスをメイズに連れ出したのは自分だ。

心の底からエルスを尊敬しているレーシアの、フィオナに対する心中は、きつと穏やかではないだろう。

無論、そんなことを態度に表してしまうようでは騎士失格。そして姫としても、申し訳なく思う気持ちをも、安易に出してはいけない。

それでも、やはりフィオナは少しでも、小柄な護衛隊長にねぎらいをかけてあげたいと思う。

「ありがとうレーシア、エルスによく鍛えられているのね……貴女の活躍を報告するのが楽しみだわ」

「はっ——ハイっ、いえっその……」

姫君の優しい心遣いに、凜々しかった二刀流の隊長騎士はツインテールをアワアワさせて、真っ赤になった。

何だか小型の子犬、みたいな少女。一方でフィオナは、鎧がブカブカしているように見えることも、気になる。

爆乳の騎士団長を尊敬するあまり、そっくりなデザインのもの、何だか異様に余る鎧を身に着けているのだ。

「ねえレーシア、その鎧——」

「はっ、ぴピッターですっ、イエス・ママっ！」

よく聞かれるのか、すごい早さで、しかも食い気味に即答された。

「…ピッタリ、ですか…?」

「ピッタリですつ、イエス・ママ!」

「…そう、そうね…」

もうきつと、ピッタリなのだろう。

そんな少女を微笑ましく思いながら、船団は帆を上げて港を出発する。水のよい香りがいつそう強く漂い、髪を流す風が冷たくて気持ちいい。

「まずは怪物に襲われていないという島、パイラパイラに向かいます」  
出発すると同時に、船上ではマリインを含めた作戦会議が開かれた。

「ヤツらは女性を攫い、卵を産みつけてふ化させるのが目的みたいでつす」

「卵を産みつけて、ふ化…」

聞かされたフィオナたちは、ふ化した怪物の子供を産まされるという、恐ろしい想像を  
してしまった。

そして船団は数時間後、港から数キロ離れた小島、パイラパイラに到着。

その島の姿は、異様だった。

半日もあれば一周できてしまいそうな小島の周りは、数メートルの高さを持った、壁の  
ごとき岩に囲まれている。

唯一岩壁がないのは北側の一角だけで、ここは壁よりも高く切り立った崖が突き出てい

て、上陸は不可能だ。

「ここが、パイラパイラ……」

(何と不気味な……)

まるで周囲との交流を拒絶するかのような、謎の島。

そして湖上を搜索していると、岩壁の隙間から一艘の黒い船が現れた。

左右から伸びる数本のオールで水を掻く中型船は、帆船に比べて小さく、遠くまで行ける船ではない。

しかも漕ぎ手の乗組員たちは、皆上半身が裸の男性で、暗い彩りの仮面を被っていて顔は見えなかった。

決して友好的とは思えない様相に、フィオナたちは緊張をする。

(伺ったお話の通り、閉鎖的な方々のようです……)

それでも姫は、相手が航海上の常識といえる距離で船を停止させたことに、理性的な人々だとも感じた。

ひとり立つリーダーらしき仮面の人物が、声をかけてくる。

「ここは我ら、パイラパイラの水域である。外界の者は立ち去られいっ！」

六隻もの武装船団を相手に、平然と威圧的な態度だ。

「姫様……!!」

護衛隊長が、油断なく相手を注視する。緊張が走る船上で、フィオナは騎士たちを制し、

自ら交渉に立った。

「わたくしはイセリア英雄王国王女、フィオナ・ブリティッシュです」  
少女姫の名前を聞いて、仮面の人物たちの空気が揺れたのがわかる。

数瞬の後「如何な用件か」と問われた姫は「湖の怪物について、何か対処法をご存じならば、ぜひともお知恵をお借りしたいのです」と告げた。

黒い船は一度島へと戻り、島の意志を伝えるために再び戻ってくる。

「貴様たちが条件に従う限り、我らはフィオナ姫の上陸を許可する」

「条件……？」

使者の言葉に、胸騒ぎがする。そして伝えられた条件は、フィオナが予想すらしていない、異様なものだった。

「船団はこの場で待機。フィオナ姫は一切の衣服装飾を排し、単身こちらの船に乗船いただく」

相手の言葉に、耳を疑う。

一国の姫君に対し、上陸したければ全裸になって、たったひとりで男たちの船に乗れ。と言っているのだ。

（そ、そんなこと……!!）

そんな理解不能な要求を突きつけられるなんて、思ってもいなかった。

斜め後ろに控えていた少女騎士も、紫色のツインテールを震わせて前に出て、怒りを露

わにする。

「貴様らっ、我らイセリアの姫君に対し、何たる破廉恥っ！」

威嚇のために、今にも剣を抜かんとする仕草を見せつける護衛隊長。

しかし暗い仮面の男たちは、変わらぬ強い言葉を返してきた。

「ならば早々に立ち去れい。我らは外界の者に用などない！」

一方的で高圧的な物言いに、船上の騎士たちの空気が怒りで熱くなる。

フィオナは、決断をしなければならなかった。

(は、裸で、彼らの船に……)

何を考えているのかもわからない男たちの中に、裸で乗り込める女性など決していない。

どう考えたって無理だ。

しかしこのままでは、あの壁画に関する手がかりも、手に入らない。

(セリーヌ、わたくしは……)

優しく美しい親友の微笑みが、頭を過る。自分は、セリーヌとの友情を信じたいのだ。

少女はひとつだけ、確認を取る。

「わたくしを含め、皆の安全は保障されますか？」

「フィオナ姫は一国の王女。指一本触れてはならぬと、長老のお言葉である」

その返答を聞いてフィオナは、決意を固める。そして一歩、前に出た。

「…そちらの船に参りましょう…！」

「なりません姫様っ！ あのような不遜の輩やからの戯言ざれごとに従うなど…っ！」

レーシアの忠言に、金髪の姫君は緊張した笑顔を見せる。

「大丈夫…彼らを信じるわ」

指一本触れないということは、無事帰ってこれるといふことでもあるのだ。

（彼らが約束を守れば、ですけれど…）

怯える心を押し込めて、フィオナは小さく数回だけ息を整えると、エメラルド色の金具を解いた。

姫君の脱衣に驚かされながらも、レーシアは部下たちに、顔を背けるよう命令を下す。

「フィ、フィオナ様っ——皆っ！」

隊長に従い、騎士たちは背中を向けて、姫を囲んで脱衣を隠す。

しかしそんな行為でさえ、パイラパイラは許さなかった。

「我らを脅かす意志のないことを証明するのならば、騎士たちは下がれ！」

「何を…っ！」

歯噛みをする騎士隊長を、フィオナは優しい口調で諭す。

「いいのよ…下がって、レーシア…」

とはいえ、声の震えが止まらない。

鎧のパーツをすべて外すと、レオタードの、首後ろを外す。

「くそう、ボクのおっぱいなのにっ！」

騎士たちが下がると同時に谷間から追われたルシィフも、悔しそうに歯ぎしりをしていった。

留め具を開けると、細くて白い首筋が大胆に露出する。レオタードをずらして、白い鎖骨や胸の肌を晒す。

さらに衣装を下げて深い谷間を露わにすると、フィオナは周囲の視線が熱になって突き刺さってくるのを感じた。

(み、皆さんが……見ている……！)

自分を守るための女性騎士たちはともかく、これから一緒に戦う沿岸諸国の男性戦士たちも皆、遠慮しながらも姫様の脱衣を注視している。

大勢の視線を意識すると、衣装を掴む手が止まってしまう。

(でも……今は……！)

息を飲んで決意をすると、姫は純白の生地を滑らせて、足元に落とした。

大きな乳房はカップに包まれ、ムッチリと谷間を形作っている。

恥ずかしさのためだろう、細いお腹は扇情的にくねられて、引き締まりながらも肉感的な柔らかさを見せていた。

上品ながらシンプルなショーツが、大きく発達した少女腰をピッタリと包み、食い込んでいる。

丸いお尻と一緒に、パツパツの腿は健康的な艶を浮かべて、男性の視線を釘付けにして



いた。

ブーツを脱ぐと、細い足首と小さな素足が露わになる。  
美しい下着姿になっても、まだ羞恥が終わったわけではない。

(まだ……これも……)

ブラのホックに指をかけると、僅かに逡巡する。

そして目を閉じて締めつけを解くと、ふたつの爆乳がタプんと解放された。

陽光に晒された白い乳房は、羞恥による薄い汗でキラキラと輝く。

(——っ！ 皆さんの、視線が……)

乳肌や先端部分に、仮面の使者や仲間の戦士たちの視線が集中。

そんな注視をフィオナ自身が意識してしまうと、桃色の媚突がキュウ……と硬化を  
してしま  
う。

さらにフィオナは、愛らしい媚顔を真つ赤に上気させながら、ウンと息を乱し、ムチムチのお尻に張りつく薄い生地へと指をかけた。

お尻肌指に触れると、自分が何をしようとしているのかが、強く意識させられてしま  
う。

もう心臓はドキドキと早鐘を打ち、今にも逃げ出してしまいたいほどだ。

「このまま立ち去るか？」

(……わ、わたくしは……っ！)

使節の声を聞いた瞬間、金髪の姫は強く目を閉じて、小さな下着をスルリと下ろした。白くて丸いお尻が、突き出される形で完全に露出。

引き締まっていて柔らかい、秘すべき下腹部までもが、周囲の人々の視線に晒されていた。

（わ、わたくし…人々の前で…っ！）

もう視線を感じない場所なんて、どこにもない。

仲間たちに見られる白い肌は羞恥で薄い紅葉に染まり、腰も無意識にモジモジとくねられてしまう。

本能的に身体を隠そうとしたら、両腕は頭上にと命令されてしまった。

愛らしい少女姫が、船上で一糸纏わぬ全裸になり、両腕を頭上に掲げる。

「ひ、姫様っ…っ！」

主を恥姿に晒した不埒な使節に対し、護衛の騎士少女は、今にも飛びかかりそうな怒りを見せていた。

そして渡りの板をかけられると、裸のフィオナは単身、黒い船へと乗船させられる。

暗い仮面を被った男たちに取り囲まれた、裸身の金髪姫。

そしてパイラパイラの船は、船団に対して動かぬように命令すると、姫を連れて島へと進路を取る。

「フィオナ様っ！」

騎士隊長の声を聞きながら、フィオナは内心の震えが止まらなかった。

(いったい、何を……)

船が通る岩の隙間は狭く、フィオナたちの船では入れないだろう。岩壁をくぐると、中は狭い港になっていた。

船が接岸すると、少女姫は両手を掲げさせられたまま上陸をうながされる。裸の足に、足場の板がヒヤリと冷たい。

(ここが、四百年前を知る孤島、パイラパイラ……何か、とても強い魔力を感じます……) 邪気はなく、むしろ聖潔な魔力だ。

頭上に広がる青い空と、孤島を囲む岩の壁。本当に外界を拒絶している。

港から扉を開けて街へ通されると、意外と大勢の人々が待っていた。

「きゃあつ——あ、あんなに人が……!」

思わず屈んで身体を隠す少女に、仮面の男が告げる。

「身体を隠すのならば、敵意ありと判断する。立ち去るがよからう」

「えっ——い、いえ、あの……」

港の人々は男性も女性も、皆裸身の少女を遠慮なく、舐めるように覗き込んでいる。

それでももう、ここまで来て帰るワケにはゆかないだろう。

「ど、どうか……長老様に……」

言いながら、全裸の姫君は震える脚で立ち上がる。爆乳と秘処を隠していた手を、息を

飲みながら頭上に掲げた。

(ああ……人々が、見ている……！)

「……ほほう……」

フィオナの裸に周囲からは、感心するような見下すような、雑な鼻息が浴びせられる。人々の服装は、神話で語られるようなそれだった。薄い生地を纏ってベルトで留めていて、足元は紐でくるサンダルのような履き物。

(まるで、神話の時代のまま、時が止まっているようですわ……)

男性も女性も、彫刻のように美しい。

そしてフィオナは全裸を隠すことも許されず、人々の間を、長老の待っている屋敷へと歩かされた。

「長老は島の中央でお待ちだ。ゆつくりと歩を進めよ」

「ゆつくり……はい……」

神話を思い起こさせる石造りの街を、仮面の男たちの先頭として、裸のまま歩かされるフィオナ。

来訪者が歩き始めると、人々は左右に並ぶように道を空けた。

一步、一步、一步。片足ごとに三秒みたいな遅さで歩かされる。両手を掲げた異国の姫の裸体には、島中の人々の視線が突き刺さっていた。

(み、見ないで、ください……)



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル！

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！  
かなり過激なライトノベル！

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!





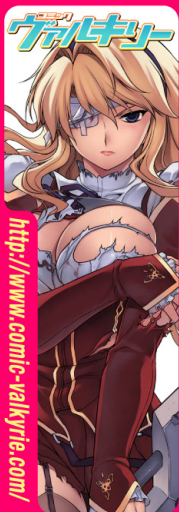




# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

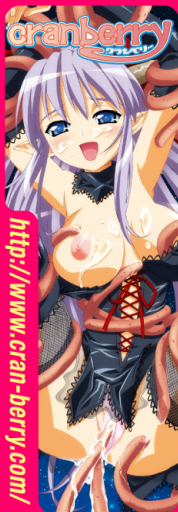
<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルスのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!